

「チャンスはあったのに決められなかった。自分たちのサッカーも出来ていなかった」と赤嶺は反省点を語った。写真はセットプレーでゴールまであと一歩に迫るも決められなかった駒大FW陣。(川崎篤彦撮影)

KOMAZAWA 0 x 0 SHINTENDO

駒澤大学 0 x 0 順天堂大学

形は作るもゴールは奪えず 深刻な決定力不足……

攻撃の意思統一の欠如

法大が筑波に勝ったため駒大はついに後期初めて一位の座を譲ってしまった。しかし、幾多の修羅場を経験している名将・秋田監督の顔には意外にも落胆の色はなかった。その理由は「やり方は悪くなかった」と振り返り、順大4本に対して15本ものシュートを放った攻撃力がいまだ健在だったことからある。特に前半は右サイドの田谷の縦への推進力が駒大の攻撃を引っ張った。前半26分、ユニバ代表・左サイドバックの小宮山を振り切り赤嶺の頭上合わせでプレーは観衆をどよめかせた。しかし、このプレーは監督は続ける。「点数を取るといふ目的のために全員同じ意識で攻めなければならぬ。個人、強気で攻めなければならぬ。個人、個人の攻撃の意識ではなく全員で統一したメンタリティーで攻撃を展開しなければ攻撃は半発で終わってしまう。セカンドボールがとれなかった」と、原が言うように、層の厚い攻撃を目指したためにはリスクを恐れず、セカンドボールを向後もホランチ、DFが拾い上げ何事も攻撃を繰り広げるのが理想。順大オフェンスの枚数が少なかつただけに、もっと大胆なDF陣の攻撃参加が欲しかった。

圧倒的に有利で試合を進めたのに点が入らない。そして、集中力が切れたゲーム開始後、分前後に決められる。東大の攻撃と駒大との試合がまさにその体として守備の意識は、全体として守備の意識は、全員で守備をすべし、と「牧野が語るよ」前半にいたっては順大の攻撃陣はセットプレー以外ではシロセなかつた。守備の意を固くしている。だからこそ必ずしも、法大戦の鍵を握るべきは、優勝を左右する大一番で駒大FW陣を演じることができ、最後に秋田監督はこう持たせたいこと、駒大イズムがこ

(香取 真人)